

# 東南アジアに散った華人茶商を追って

## 須賀 努

これまで約10年に渡り、中国及び台湾茶の歴史を追いかける旅をしてきた。特に近年は台湾茶の歴史を重点的に調べており、その茶のほとんどが元々は対岸の福建省からもたらされていることを知り、台湾茶の流れで福建省の茶産地を訪れることも増えてきている。

福建省と言えば日本でもお馴染みの烏龍茶の産地であり、特に名高い『鉄観音茶』発祥地は、安溪である。この安溪の茶の歴史を聞いて行くと、茶の生産と同時に、『華僑の故郷』という言葉が頻繁に出てくる。世界に数千万人いると言われる華僑（華人）の中で一番多いのはやはり福建出身であろう。

今回は2018年から2020年初めまで、マレーシア、シンガポール、タイなどを旅して、華人茶商を訪ね歩いた様子の一部を紹介し、東南アジアに根付く華人について、その足跡、茶の歴史を辿ってみた。

### マレーシア、シンガポール

マレー半島における華人の活動の歴史はかなり古い、特にオランダがマラッカを占領した17世紀中頃から福建から反清朝勢力の渡航が増え始め、貿易業に従事した。1786年以降イギリスがいわゆる海峡植民地（ペナン、マラッカ、シンガポール）を支配すると、福

建及び広東から来た華人もここを拠点に商売を展開していく。

そして1820年代より、錫鉱山ブームが起こり、広東の梅州、惠州の客家を動員炭鉱技術などを持っていたため、太平天国の乱などの影響により出国ブームもあり、大量の労働者が中国からやってきた。

そこで華人相手の商売を始める華人も登場してくる。マレーシア、シンガポールで華人茶商が店舗を構えたのは1900年頃のことと言われている。貿易商などで財を成した華僑や労働者で生活が安定した人々が茶を飲み始めた。同時に炭鉱労働者の必需品として茶があったことも伝えられている。

1920年代にシンガポールでいわゆる老舗と言われた茶荘が数多くオープンしてくる。これも中国国内の混乱などにより、海外にチャンスを求める人が増えたことも要因だろう。マレーシアにも支店を多く出し、華人相手に福建茶などが販売されている。その代表的な人物として、李慶年が挙げられる。

林慶年の曾祖父、林宏徳が1850年代に故郷の福建省安溪で林瑞泰茶荘を設立し、ちょうど茶葉の海外輸出が始まる時期に安溪茶を東南アジアに送り出していた。

その後叔父の林詩国が1918年に林金泰を設立して、引き続き東南アジアを舞台に茶葉の輸出をしていたが、北京大学を卒業したばかりの林慶年が派遣され、東南アジア市場の開拓に乗り出した。1924年には自らクアラルプーに林金泰を設立し、翌年にはシンガポールにも進出して、こちらを本店として活動した。

1936年に叔父が亡くなり、林慶年が事業を引き継ぐ。当時シンガポール・マレーシアにおいては、『金泰茶』と言えば『福建茶』の代表銘柄であり、茶館では店員が客に『六堡茶にしますか？それとも金泰茶？』と聞くほど、有名であったと言われている。

茶業公会でも1928年の設立時より名簿に名があり、1930年から1968年に亡くなるまで、長年に渡って会長を務め、また茶業界代表として、シンガポール中華商会の会長にまで昇り詰め、華人社会でその影響力を存分に発揮した。

ただ故郷中国大陸では共産化、国営化が進み、1960年にはマレーシア・シンガポールで共同茶葉輸入会社、岩溪茶行が作られ、茶業が統合されていく。同時に東南アジア各地で、反共、華人排斥が起こり、また華人の現地化、更には西洋化による飲料需要の変化（コーラ、コーヒーなど）もあり、中国茶への関心は薄れていく。

絶大な栄華を誇った林慶年の時代が終わると、その一族ももっと儲かるビジネスへの転換を行い、また海外への留学、移住などで、シンガポールからその姿は消えている。成功した華人は子弟に高等教育を受けさせるため、

医師や弁護士などになる者、海外から戻らない者も多いと聞く。

林慶年は、これまで訪ねてきた多くの華人茶商とは異なり、北京大学卒業の秀才であり、茶業のみならず、実業家としても成功し、更にそれに留まらず政治的な活動にも取り組んだ、華人社会のリーダー的な存在であった。正直『こんな人物が茶業界にいたのか』と驚かされる。

## タイ

タイに中国人がやってきたのは、中国宋代の12世紀と言われている。最初にやってきたのは福建人。だがタイ華人の特徴は何といっても、他国では見られない、全体の7割を潮州系が占めていることであろう。

バンコックに中国茶荘が出現するのは1930年代と言われている。福建茶を商うほか、日本領だった台湾との結びつきから、包種茶の輸入を行う茶商も多かった。基本的にタイ人は茶を飲まないと言われているが、1945年前後には華人の中でこのタイ人市場に目をつけ、オレンジ色で独特のにおいにするタイ茶製造が始まる。今では東南アジアにまで広がっているタイ茶、華人の知恵による商売の成功例だろう。

チェンライ郊外メーラオといふのどかな村に忽然と茶畑が現れ、茶工場も見える。天元茶行の経営者、ヒジャーブを被った納順安さん(写真左)が笑顔で迎えてくれた。納さんがイスラム教徒であることは見ればわかるが、彼女の一族は中国雲南省から来た回族であった。



祖父は雲南省昆明市玉溪市通海県納古鎮の出身。ここは元々納家の村であり、今も多くの回族が暮らしている。驚くべきことに、『ここに居住した回族は、更に迎ればチンギスハンの末裔と呼ばれている』と言い、『チンギスハンの一族が雲南に住みつき、回族になった』という。

雲南回族は馬、納などの姓を持つ。有名なのは馬幫と呼ばれ、中国とアジアを股にかけて活動した貿易商(運送業)であろう。何故雲南回族は馬の扱いに慣れているのかモンゴルの末裔であれば、その謎は一気に氷解する。チンギスハンの末裔は中央アジア、西南アジアにも広く分布しており、雲南からタイ北部、ミャンマー北部に居ても何らおかしくはない。因みにチェンライ市内には大きな清真寺があるが、雲南系ムスリムを仕切っている顔役

は、なんと明の永楽帝時代に大航海した、あの鄭和の子孫だというから、チェンライの位置づけ、重要性にまで思い至る。

納さんの祖父は、雲南からビルマを歩いて下り、タチレクからタイ側の茶房と呼ばれる山中に入る。

その息子、納広勝は12歳にして近隣の山中の古茶樹から茶葉を摘み、茶工場に売っていた。学校は歩いて山を越え、メーサローンまで通ったが、当時その地には国民党がビルマから逃げ込んでおり、その司令官段將軍にも気に入られ、可愛がられたという。

25歳の時、数人で茶樹がある山を買い、緑茶を作って、道なき山道を馬で茶葉を運んだ。茶葉は順調で、山を買い増して生産量を増やしていく。その後1990年代メーサローンなどで台湾の支援により、烏龍茶作りが始まると製造技術を学び、生産を開始する。

1997年、現在の茶園の場所に茶樹を植えることにした。台湾やベトナムに視察に行き、低地(標高400m)でも良質の茶が出来ることを確信して、2エーカーの土地を購入。近隣の農民から土地の売却話が多く持ち込まれ、今や100エーカーの広大な茶畑となっている。

回族で茶業をしている人が多いという訳ではないが、チェンマイにも彼らの親戚がおり、やはり馬幫の出身で、現在はタイの噛み茶、ミエンから健康茶を作っている企業もある。タイには実は想像以上の茶の歴史があることを知り、益々興味が沸いている。

(すがつとむ・アジアンウォッチャー)